

胄山の歌

頼山陽

胄山 昨我を送り

胄山 今吾を迎う

黙して教うれば 山陽十たび 往返

山翠依然 我は白鬚

故郷に親有り 更に衰老

明年当に復此の道を下るべし

【作者】 頼山陽（一七八〇〜一八三二年）名は襄（のぼる）、字は子成（しせい）、号は山陽。安永九年十二月

大坂江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳の時叔父杏坪について書を読み、十八歳で江戸に遊学した。二十一歳で京都に走り、脱藩の罪により幽閉される。のち各地を遊歴し、天保三年九月病のため没す。年五十三歳。著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府（がふ）」などがある。

【語釈】 \*青 山…兵庫県西宮市にある。六甲山系の南東端に位置し標高三〇九m、胄の形をしているのでこの

名がある 中腹に真言宗神呪寺（かんのうじ）がある。 \*山 翠…山のみどり。

\*依 然…もとのまま。 \*白 鬚…白いあごひげ。 \*故 郷…現在の広島市。

\*親…山陽の母。 父春水の妻 静子（梅▲風へんに思Vばいし）夫人

\*應…まさニ…べしと読む再読文字 きつと…するだろう

【通釈】 胄山は昨年帰郷する私を見送ってくれたが、その同じ山が今年は上京する私を迎えてくれる。

目を閉じて静かに数えてみると、もう十度もこの山陽道を往復している。山のみどりは今も昔ももとのままなのに、自分は年とともに老いてあごひげも白くなった。

故郷には母がおり一層老いてゆくので、明年もまたこの道を下って、きつと会いにいくだろう。

【備考】 頼山陽は広島に母がいたため、京都と広島の間を何回も往復している。この詩は文政十年（一八二七）

九月、四十八歳の時の作である